

臨床心理士の志望動機の違いと

心理臨床活動における体験についての語りとの関係

—消極型, 対象・実利型, 苦悩・実存型の3タイプに着目して—

上野まどか (和光大学大学院)

【問題】

心理臨床家は、自分自身を“道具”にして、クライアントの内面に深く立ち入る活動をする専門家である (滝口, 2011, p.126)。ゆえに、心理臨床家側の要因が、心理臨床活動やクライアントにどのような影響を及ぼすかについて知見を得ることが重要である。心理臨床活動に影響を及ぼすと言われているものの一つに、なぜ心理臨床の職業を選んだのかという心理臨床家の志望動機が挙げられる (上野, 2013)。

志望動機は心理臨床活動と関連すると言われているが、特に関連があると言われているのは、心理臨床活動における困難や満足感である (Barnett, Baker, Elman & Schoener, 2007; Corey & Corey, 1998 下山監訳 2005; 遠藤, 1997; Farber et al., 2005; Guy, 1987; 堀越・堀越, 2002; O'Connor, 2001; Racusin et al., 1981; Sussman, 1992; 上野, 2010, 2013, Zaro et al., 1977 森野他訳 2008)。まず、心理臨床活動における困難においては、例えば、Zaro et al (1977 森野他訳 2008) は、心理臨床家の志望動機が、その後の心理臨床活動において経験する困難や個人的苦悩とかなり関連すると指摘する。また、堀越・堀越 (2002) は、心理臨床家の志望動機に関わる過去経験や傷つきやすさ、未解決の欲求などが、クライアントの欲求に目を向けることを阻んだり、個人的に抱えている対人関係の問題や自己表現の問題を悪化させたりしてしまうと指摘する。Barnett et al (2007) も、志望動機に関わる過去経験や傷つきやすさ、世話役割などの個人の傾向が、サイコロジスト自身を悩ませたり、自分の関心や問題、バーンアウトの兆候に目を向けることを疎かにさせると指摘する。このように、心理臨床家の動機が、心理臨床活動や心理臨床家自身の精神的健康に影響を及ぼる可能性が論じられている。

次に、志望動機と心理臨床活動における満足感との関係において Corey & Corey (1998 下山監訳 2005, p.16) は、例えば、志望者の典型的な動機である必要とされたい欲求があった場合、“実際に他者の求めに応じていくことで大いなる満足を得る”と指摘している。このように、心理臨床家が得られる満足感が、動機に対応して生じると指摘されている (Sussman, 1992)。

またその他にも、志望動機は、キャリアや理論的志向性の選択 (Guy, 1987; 堀越・堀越, 2002; 塩尻・福田, 2005; 上野, 2013; Sussman, 1992) や、援助欲求の強さ (Krous & Nauta, 2005) と関連すると言われている。例えば、上野 (2013) の量的研究法を用いた分析によると、心理臨床家を志望したきっかけとして苦悩体験を有する心理臨床家が、無意識を追求するユングの分析心理学を志向する傾向があることや、志望動機が消極的であった人が、志向する理

論的を持たない傾向があること、経済的安定を求める心理臨床家がクライアントの経済的側面などの負担を低減する効果が期待される短期療法の基礎となるシステム理論を志向する傾向があることなどを指摘し、志望動機のタイプと理論的志向性との関連を見出している。さらに上野（2013）の質的研究法の結果によると、消極的動機で志した心理臨床家と苦悩体験をきっかけで志した心理臨床家の、心理臨床活動における体験を語るときの視点が異なることを見出した。心理臨床活動における困難において、前者は環境的側面に着目して語るなど、外的および可視的な特徴があり、後者は、困難をクライアントと自分との相互作用的側面から、および自己に起因するとして着目しやすい対自的特徴が見られた。

以上のように、心理臨床家を志す動機は、その人がやがて心理臨床活動を始めた後の体験と関係は深いことが示されている。しかし、動機と心理臨床活動との関係について指摘した実証的研究は、上野（2011, 2013）、Sussman（1992）、Krous & Nauta（2005）のみと少ない。よって、本研究では、志望動機と心理臨床活動における体験についての語りとの関係を検討する。

なお、本研究は、上野（2013）の量的研究を基にして研究を発展させたものである。上野（2013）は心理臨床家志望動機尺度を作成し、心理臨床家の志望動機を大きく分けて3つ（＜消極＞、＜対象・実利＞、＜苦悩・実存＞）になると示した。まず、＜消極＞は、志望動機が低く消極的特徴を有するタイプである。次に、＜対象・実利＞は、心への知的関心や経済的安定といった因子得点が高く、興味関心を抱く対象が限定的で目的が絞られているタイプである。そして、＜苦悩・実存＞は困難体験や情緒的苦悩の体験を有したタイプである。また、この3つのタイプをより細かく分けると、6つ（《消極型》《知的型》《経済型》《消極型》《関係型》《苦悩型》《状況困難型》）に分かれると示した。そして先述したように、志望動機のタイプが、理論的志向性および心理臨床活動における体験を語る時の視点と関連することを示した。本研究では、志望動機と心理臨床活動との関係を見出すため、上野（2013）のインタビュー協力者15名に加えて協力者8名を増やし、上野（2013）では用いられていなかったテキストマイニング分析法を用いて、志望動機と心理臨床活動における体験についての語りとの関係を検討する。

【目的】

テキストマイニング分析法を用いて、志望動機と心理臨床活動における体験についての語りとの関係を検討する。

【意義】

志望動機といった心理臨床家の個人的及び内面の要因が、心理臨床活動における体験とどのように関係するののかについて示唆を得ることは重要である。なぜなら、第一に、心理臨床家はクライアントに及ぼす影響を考え、より効果的機能的に関わるため、自己理解している必要がある（Corey & Corey, 1998; 真澄, 2009; 滝口, 2011; Rønnestad & Skovholt, 2001）。そのため、本研究は心理臨床家が自分の傾向を知り、心理臨床活動に及ぼす影響を考えるための基礎資料となり得る。第二に、心理臨床家の動機と、心理臨床活動における体験についての語りとの関係を明らかにすることで、心理臨床活動やクライアントへの影響を予測する

ことができる。そして、心理臨床活動の質や心理臨床家の精神的健康の低下、そしてクライアントの不利益への波及といった否定的影響を予防するための対策を検討することができると考えられる。第三に、心理臨床家の教育・養成をする立場においては、学生や訓練生がどのような動機で志し、そして心理臨床活動（実習）においてどのような影響が出ているかを吟味するのに役立つだろう。

【方法】

分析対象

先述したように、上野（2013）は、クラスタ分析によって心理臨床家を志した動機のタイプを、〈消極〉、〈対象・実利〉、〈苦悩・実存〉と大きく3つに分けた。本研究では、それぞれのタイプの中で、心理臨床活動の経験をもち臨床心理士資格を有する、6名、3名、14名の計23名をインタビューの対象とした（女性14、男性9名、平均年齢47.8歳、平均心理臨床経験年数19.3年）。そして、テキストマイニングの分析の対象は、これらの23名の語りとインタビューアの応答とした。

インタビュー調査

(1) 対象者

〈消極〉の6名の属性は、女性10名、男性4名、平均49.8歳（範囲30代前半～60代前半）、心理臨床活動の経験年数は平均23.7年（範囲8～40年）であった。理論的志向性は、折衷主義2名であり、精神分析1名、システム理論1名、その他1名、特になし1名であった。継続的なスーパーヴィジョンを受けた経験のある人は5名（範囲0～12年）だった。教育分析を受けた人は0名だった（「教育分析」の定義は、「精神分析家や心理臨床家になろうとする人は、訓練のための精神分析や心理療法を自ら体験する。これを教育分析とよぶ（心理臨床学辞典, 2011, p.126）」とした）。

〈対象・実利〉の3名の属性は、女性2名、男性1名、平均43.3歳（範囲30代前半～50代後半）、心理臨床活動の経験年数は平均18.3年（範囲5～37年）であった。また、理論的志向性は、折衷主義、アドラー心理学、特になし共に1名であった。継続的なスーパーヴィジョンを受けた経験のある人は2名だった。教育分析を受けた人は0名だった。

〈苦悩・実存〉の14名の属性は、平均年齢は47.9歳（範囲30代前半～50代後半）心理臨床活動の経験年数は平均18.7年（範囲8～35年）であった。また、理論的志向性は、折衷主義3名であり、クライアント中心療法3名、精神分析2名、分析心理学2名、システム理論1名、認知行動理論1名、その他1名、特になし1名であった。継続的なスーパーヴィジョンを受けた経験のある人は11名（範囲0～22,3年）だった。教育分析を受けた人は9名（範囲0～21年）いた。

なお、上野（2013）のインタビュー対象者は15名であった。新たに8名を本調査の対象者として含めた。

(2) 時期

2011年12月と2012年6月～11月に募集を行った。2011年12月末～2013年5月にインタビューを実施した。

(3) 場所

基本的に対面で行い、遠方であり対面する日程が合わなかった1名とは電話でインタビューを実施した。個室もしくは、個室と同等に会話が周囲に聞こえない場所であり、お互いの

声がよく聞こえることを基準に合意の上で場所を選定した。

(4) インタビュー手続き

インタビュー概要について説明し、同意書と誓約書を交わした。インタビューガイドと協力者の話りの流れに沿って進行した。インタビューに要した時間は 80 分から 120 分程度であった。

(5) 質問項目

質問項目は、Dryden & Spurling (1989) と上野 (2007, 2010) のインタビュー調査を参考にして暫定版を作成した。臨床心理士を有する教員 1 名と大学院生 3 名で数回の検討を行った後、模擬インタビューを行い、最終的にインタビュー項目を決定した。質問項目の構成は、属性についての質問 (年齢, 経験を積んできた領域, 理論的志向性, 経験年数, SV を受けた経験年数, 教育分析を受けた経験年数), 役に立った訓練・教育, 志望動機, 心理臨床活動動機, 心理臨床活動における困難と困難への対処と結果, 心理臨床活動における満足感, 自分の動機や個人的な体験で臨床活動に影響していること, について尋ねた。

(6) 倫理的配慮

研究参加に際し、研究者は個人のプライバシーや権利を尊重、保護すること、調査協力は協力者の自由な意思に任されているため、答えたくない質問が出た場合は断っても構わないこと、インタビューに参加することを同意した後でもそれを撤回することが出来ることなどを書面で説明した。その内容について同意が得られた場合には、同意書と誓約書を交わした。

インタビューは、了解をとって IC レコーダーに録音した。インタビュー中は、話しやすい雰囲気を維持するため、協力者が話すことに対して常に積極的肯定的な関心を表し、感情的負担にならないよう配慮した。インタビューの最後にはインタビューの感想と質問を求めた。逐語録は、個人が特定されないよう固有名詞は全て記号に置き換え作成した。

分析手順：

23 名の逐語録を Text Mining Studio4.1 で読み込んだ。語り手は<消極><対象・実利><苦悩・実存>の 3 属性に分類した。テキストマイニングを用いた分析は、(1) 全データと志望動機タイプごとのデータの基本統計量、(2) 志望動機タイプごとの特徴語分析、(3) 対応バブル分析を行った。

【結果】

(1) 全データと志望動機タイプごとのデータの基本統計量

23 名の全テキストデータの基本情報と、志望動機のタイプごとの基本情報を Table1~4 に示す。全データの平均文字数は 38.7 字、総文字数 (センテンス数) は 16,016 文、平均分長 (文字数) は、16.4 字、延べ単語数は 105,446 個、単語種別数は 13,306 個であった。語り手の豊富さを示す指標であるタイプ・トークン比は、延べ単語数と単語種別数から算出した結果 (単語種別数 / 延べ単語数)、0.0915 であった。数値は比較的低いことから、共通に用いられる単語が多いことが示された。

Table 1 全テキストデータの基本情報

	項目	値
1	総行数	6804.000
2	平均行長(文字数)	38.700
3	総文数	16016.000
4	平均文長(文字数)	16.400
5	延べ単語数	105446.000
6	単語種別数	9649.000

Table 2 <消極>の基本情報

	項目	値
1	総行数	2292.000
2	平均行長(文字数)	31.700
3	総文数	5075.000
4	平均文長(文字数)	14.300
5	延べ単語数	29224.000
6	単語種別数	4467.000

Table 3 <対象・実利>の基本情報

	項目	値
1	総行数	640.000
2	平均行長(文字数)	44.000
3	総文数	1714.000
4	平均文長(文字数)	16.400
5	延べ単語数	11193.000
6	単語種別数	2376.000

Table 4 <苦悩・実存>の基本情報

	項目	値
1	総行数	3872.000
2	平均行長(文字数)	42.000
3	総文数	9227.000
4	平均文長(文字数)	17.600
5	延べ単語数	65029.000
6	単語種別数	6956.000

(2) 志望動機タイプごとの特徴語分析

各タイプにおけるインタビュー協力者の特徴的な言葉表現や言葉の使い方を分析するため、特徴後分析を行った。その際、品詞を「動詞」に限定し、述語属性を「要望」にした。なお、本文中では協力者の語りを「斜体」で示し、筆者の補足は〈 〉内に示す。以下に、<消極>、<対象・実利>、<苦悩・実存>それぞれのタイプの心理臨床活動における語りの特徴を示す。

まず、<消極>に特徴的であった「動詞+要望」は、「取る+したい」、「わかる+したい」、「役に立つ+したい」であった (Table5)。「取る+したい」の語りは「臨床心理士取りたい」「ロールシャッハを取りたいっていう」など、資格や心理検査を取ることに着目した語りが見られ、紙面上に視覚的に表示されるものへの志向性が伺えた。また、「わかる+したい」においてはクライアントを理解するという語りは見られず、「自分のことがわかりたい」など自分の心理的な側面への興味がみられた。「役に立つ+したい」はクライアントに役立ちたい気持ちを表しており、

消極的な動機で志しているものの、心理臨床活動においては愛他的な行動をとることへの動機付けが示されていた。ただし、属性頻度が最も高いもので 5 個と低めであり、＜消極＞は他の 2 つのタイプに比べて目立った特徴が見られにくい可能性がある。

次に、＜対象・実利＞に特徴的であった「動詞＋要望」は、「知る＋したい」と「する＋したい？」および「する＋したい」、「辞める＋したい」であった (Table6)。「知る＋したい」の語りは「人間に対してもっともっと知りたいっていうのが不思議と強い」「自分のことをもうちょっと知りたいなーと思っていて」などがあり、心に対する知的好奇心が強いことが示された。「する＋したい」および「する＋したい？」は「〈専門性をもつことが〉自分のしたいように生きていける」「その為はどうすればいいのかって」などがあり、どのように行動を起こしたらよいかについての熟考を意味していた。「辞める＋したい」は「早く辞めても良かったんだけど」「辞めたくなくなったから辞められる仕事じゃないなっていう。それで続けてるっていうのも失礼だけど」などがあり、心理臨床活動や職場を辞職するかどうかの葛藤が表れている様子が示された。

最後に、＜苦悩・実存＞に特徴的であった「動詞＋要望」は、「やる＋したい」、「助ける＋したい」、「死ぬ＋したい」であった (Table7)。「やる＋したい」の語りは「やっぱり家族療法やりたいて思っていましたし」「ちゃんとやりたいていうのはありました」「とにかくやりたいて、やりたいて、やりたいて思っ」などがあり、心理臨床活動に対する意欲が非常に高かった時期があることが伺えた。また、「助ける＋したい」は全体頻度 10 個中 9 個を＜苦悩・実存＞が占めていた。「助ける＋したい」の語りは「人の世話焼きたいとか困っている人がいたら助けたいとか」「人の役に立ちたい、助けたいっていうのは高いですね」などがあり、クライアントを助けることへの意欲の高さも示された。「死ぬ＋したい」は全体頻度 7 個中 6 個を＜苦悩・実存＞が占めていた。「死ぬ＋したい」の語りの主語は、協力者自身である場合と関わっているクライアントである場合があった。協力者自身が主語である語りは、「死んじやないって思うような〈気持ち〉が自分の中にもある」などに表れており、クライアントである語りは「重たい人が死にたい死にたいと言ったら」などに表れていた。＜苦悩・実存＞は、自分とクライアントの死に着目したり、クライアントの死や希死に関わる、またはそのような重症のクライアントに関わった経験があることが伺えた。

Table5 ＜消極＞の特徴語 (全体出現回数 7 回以上)

	単語	品詞	品詞詳細	属性頻度	1. 全体頻度 ▼	指標値
1	行く＋したい	動詞	自立	5	15	4.051
2	取る＋したい	動詞	自立	5	11	6.183
3	わかる＋したい	動詞	自立	4	10	4.307
4	役に立つ＋したい	動詞	自立	4	9	4.840
5	見る＋したい	動詞	自立	3	7	3.496

Table6 <対象・実利>の特徴語（全体出現回数 7 回以上）

	単語	品詞	品詞詳細	属性頻度	1. 全体頻度▼	指標値
1	知る+したい	動詞	自立	7	23	14.889
2	する+したい?	動詞	自立	3	15	4.615
3	する+したい	動詞	自立	3	15	4.615
4	辞める+したい	動詞	自立	7	13	18.323
5	来る+したい	動詞	自立	3	12	5.645
6	言う+したい?	動詞	自立	3	10	6.332
7	生きる+したい	動詞	自立	2	8	3.763
8	入る+したい	動詞	自立	2	7	4.107
9	見る+したい	動詞	自立	2	7	4.107

Table7 <苦悩・実存>の特徴語（全体出現回数 7 回以上）

	単語	品詞	品詞詳細	属性頻度	1. 全体頻度▼	指標値
1	やる+したい	動詞	自立	84	119	8.930
2	きく+したい	動詞	自立	21	26	7.583
3	言う+したい	動詞	自立	19	24	6.182
4	する+したい?	動詞	自立	12	15	4.129
5	就く+したい	動詞	自立	11	13	4.855
6	貰う+したい	動詞	自立	11	11	7.709
7	助ける+したい	動詞	自立	9	10	4.881
8	死ぬ+したい	動詞	自立	6	7	2.778

(3) 対応バブル分析

次に、志望動機の違いと、「動詞+要望」との関係性を視覚的に示すため、対応バブル分析を行った (Figure1)。

各タイプの近くには、次の「動詞+要望」が布置された。まず<消極>は、「取る+したい」、「わかる+したい」、「役に立つ+したい」「進める+したい」と深い関係があることが示された。次に<実利・目的>は、「知る+したい」、「辞める+したい」と深い関係があることが示された。最後に<苦悩・実存>は、「やる+したい」、「やる+したい?」「助ける+したい」、「死ぬ+したい」、「貰う+したい」などと深い関係があることが示された。よって、概ね特徴語分析の結果と一致した結果が得られた。

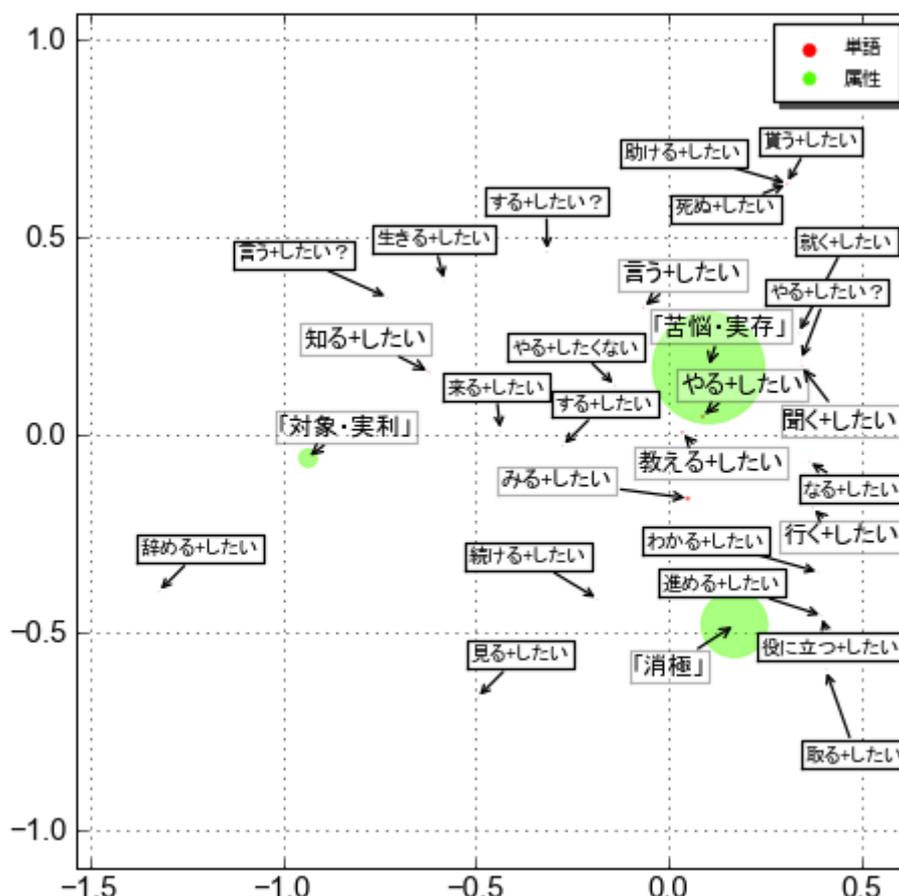


Figure1 志望動機のタイプと「動詞+要望」との関係対応バブル分析

【考察】

1. 本研究で明らかになったこと

本研究では、各志望動機のタイプ別に特徴語分析を行った後、対応バブル分析を実施した。その結果、志望動機のタイプごとに異なる心理臨床活動における体験についての語りの特徴が見られた。

まず、＜消極＞は、「取る+したい」、「わかる+したい」、「役に立つ+したい」の語りが見られ、語りの内容から、資格や心理テストなどの可視的なものに対する志向性が高いことが示された。この結果は、志望動機が低い《消極型》が、外的で可視的な部分に着目しやすいと述べる上野（2013）の指摘と同様であった。なお、上野（2013）は、《消極型》は、外的要因および心理・実利的報酬の動機を有していると述べており、対人援助動機については強調していないが、本研究では、「役に立つ+したい」の語りが特徴語で上位に挙がっており、対人援助動機も有していることが示された。すなわち、＜消極＞は消極的な動機で志したと考えられるが、心理臨床活動を行う過程においては「役に立つ」ことを念頭に活動している可能性が示された。

次に＜対象・実利＞において、特徴語分析と対応バブル分析から共通して見られた単語は、「知る+したい」と「辞める+したい」であった。＜対象・実利＞は、心への知的関心や経済的安定の望みが高いタイプであり、「知る+したい」が上位に挙がったことから現在も心に対する知的

好奇心が強い特徴があると思われる。このように知的好奇心は強いが、「辞める＋したい」も上位に挙がっており、心理臨床活動や職場を辞職するかどうかの葛藤が表れていることが示された。＜対象・実利＞は興味関心を抱く対象が限定的で目的が絞られているタイプであるため、限定的な志向性（興味や目標）に合わないと感じた時には、キャリア再考の過程が生じたことを意味している可能性がある。しかし、＜対象・実利＞の協力者は3名と少ないことから、今後サンプルを増やし再度検討していく必要があるだろう。

最後に＜苦悩・実存＞の特徴語は、「やる＋したい」、「助ける＋したい」であり、心理臨床活動に対する動機付けが非常に高く、クライアントを「助けたい」という動機も高いことが示された。＜消極＞の「役に立つ＋したい」の内容と比べると、クライアントへの思い入れの強さが伺える。上野（2013）の質的研究の結果からも、《苦悩型》はクライアントに対して強い思い入れや肩入れをする体験があることが指摘されており、「助けたい」という思い入れの強さは、本研究においても同様であった。しかし、欧米の体系的な心理臨床家の職業的発達段階モデルによると、セラピストはクライアントに強く思い入れたり肩入れをしたりする過程を経て、自分の限界や強みを理解して適切で温かみのある内的枠組みをもてるようになる。その上で、一人一人のクライアントに熱心に関われる段階に移行していく。この過程はセラピストの一般的な職業的発達の過程であると論じられている（Rønnestad & Skovholt, 2003; Skovholt, 2012; Skovholt & Rønnestad, 1995）。したがって、「助けたい」という強い思い入れを持ちつつも、どのように位遠路に関わっているのかを今後調べていく必要があるだろう。また、＜苦悩・実存＞の特徴語として、「死ぬ＋したい」も上位に挙がっていた。語りの内容から、その主語が自分（協力者自身）である場合とクライアントである場合があった。苦悩体験を有する心理臨床家は自分と同じような苦悩体験を語るクライアントに対して、同情や過度な同一視を行う可能性があることから（Rønnestad & Skovholt, 2003; 岩壁 2007）、苦悩体験をしてきた＜苦悩・実存＞は、希死念慮を抱くような重症のクライアントに関わろうとする意欲が高い可能性がある。その場合、自分自身の問題（例えば、死にたいという気持ちなど）を対処している、もしくは心理臨床活動への影響を意識していること重要である。なぜなら、“欲求に基づいて援助のための介入の在り方を決めてしまう”危険性があるからである（Barnett et al., 2007; Corey & Corey, 1998 下山監訳 2005 p.13; Guy, 1987; 堀越・堀越, 2002）。

2. 臨床心理学領域への示唆

心理臨床家はクライアントに及ぼす影響を考え、より効果的機能的に関わるため、自己理解している必要がある（Corey & Corey, 1998; 真澄, 2009; 滝口, 2011; Rønnestad & Skovholt, 2001）。本研究では、＜消極＞が、資格や心理テストなどの可視的なものに対する志向性が高いこと、＜苦悩・実存＞が「助けたい」という強い思い入れが強く、心理臨床活動に対する動機が高いこと、そして＜苦悩・実存＞が自他の「死」に着目しやすいか傾向があることなどが示された。これらの結果は心理臨床家が自分の傾向を知り、心理臨床活動に及ぼす影響を考えるための基礎的資料となり得る。臨床心理士の教育・養成をする立場においては、学生や訓練生がどのような動機を有して志したかを見つめられる機会を設定することで、心理

臨床活動（実習）やクライアントとの関わりにどのような影響が出る可能性があるかを吟味するなど、臨床指導を行う際にこれらの基礎的資料が非常に有益になるだろう。

本研究と上野（2013）の結果から、志望動機が異なると、心理臨床活動における体験の特徴も異なることが示された。したがって、職業的発達において異なる過程を辿る可能性もある。本邦の臨床心理士の職業的発達を既成のモデル（Rønnestad & Skovholt, 2003; Skovholt, 2012; Skovholt & Rønnestad, 1995）に照らし合わせながら理解していくことも可能ではあるが、志望動機のタイプ別に職業的発達を見てくことで、タイプに応じたより詳細な発達過程を理解することが出来るだろう。

3. 本研究の限界と課題

<対象・実利>の協力者は3名と少ないことから、今後サンプルを増やし再度検討していく必要があるだろう。分析は、品詞を「動詞」に限定し、述語属性を「要望」にして行ったが、他の品詞や述語属性にした分析も興味深い。また志望動機のタイプ別に心理臨床活動における体験の語りを時系列分けて分析を行うことで、タイプ別の職業的発達についての手掛かりが得られると期待でき、今後の分析を行っていくことが望ましい。

【謝辞】

本研究は、株式会社数理システムの Text Mining Studio をお借りし実施しました。また、本研究のインタビューデータの一部は、明治学院大学心理学部の金沢吉展教授からご指導頂いた博士論文作成時のものであり、テキストマイニングの方法論については、和光大学現代人間学部の伊藤武彦教授のご指導を賜りました。最後に、貴重なお時間を頂戴しインタビューに協力して下さいました臨床心理士の先生方に心より感謝申し上げます。

【参考・引用文献】

- Barnett, J. E., Baker, E. K., Elman, N. S., & Schoener, G. R. (2007). In pursuit of wellness: The self-care imperative. *Professional Psychology: Research and Practice*, **38**, 603-612.
- Corey, M., & Corey, G. (1998). *Becoming a helper*. 3rd ed. CA US: Thomson Brooks/Cole Publishing.
- （下山晴彦 監訳 堀越勝・堀越あゆみ 訳（2005）. 心理援助の専門職になるために—臨床心理士・カウンセラー・PSW を目指す人の基本テキスト 金剛出版） 第2版
- Dryden, W., & Spurling, L. (Eds.). *On becoming a psychotherapist*. NY: Psychology Press.
- Elliott, D. M., & Guy, J. D. (1993). Mental health professionals versus non-mental-health professionals: Childhood trauma and adult functioning. *Professional Psychology: Research and Practice*, **24**, 83-90.
- Farber, B. A., Manevich, I., Metzger, J. & Saypol, E. (2005). Choosing psychotherapy as a

- career: Why did we cross that road? *Journal of Clinical Psychology*, **61**, 487-494
- Guy, J. D. (1987). *The personal life of the psychotherapist*. New York: Wiley.
- 堀越あゆみ・堀越勝 (2002). 対人援助専門職の基礎にあるもの 精神療法, **28**, pp.425-432.
- 岩壁茂 (2007). 心理療法・失敗例の臨床研究—その予防と治療関係の立て直し方— 金剛出版
- Krous, T. M. D., & Nauta, M. M. (2005). Values, Motivations, and Learning Experiences of Future Professionals: Who Wants to Serve Underserved Populations? *Professional Psychology: Research and Practice*, **36**, 688-694.
- O'Connor, M. F. (2001). On the etiology and effective management of professional distress and impairment among psychologists. *Professional Psychology: Research and Practice*, **32**, 345-350.
- Racusin, G. R., Abramowitz, S. I., & Winter W. D. (1981). Becoming a therapist: Family dynamics and career choice. *Professional Psychology*, **12**, 271-279.
- Rønnestad, M. H., & Skovholt, M. T. (2001). Learning arenas for professional development: Retrospective accounts of senior psychotherapists. *Professional Psychology: Research and Practice*, **32**, 181-187.
- Rønnestad, M. H., & Skovholt, M. T. (2003). The Journey of the Counselor and Therapist: Research Findings and Perspectives on Professional Development. *Journal of Career Development*, **30**, 5-44
- 塩尻智也・福田廣 (2005). カウンセラー志望者の志望動機について—自我同一性, 過去経験および進路選択からの分析 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, **19**, 103-109.
- Skovholt, M. T. (2012). *Becoming a Therapist: On the Path to Mastery*. Hoboken, New Jersey: John Wiley & Sons.
- Skovholt, M. T., & Rønnestad, M. H. (1995). *The evolving professional self: Stages and themes in therapist and counselor development*. Oxford, England: John Wiley & Sons.
- Sussman M. B. (1992). *A curious calling: Unconscious motivations for practicing psychotherapy*. MD US: Jason Aronson.
- 滝口俊子 (2011). 教育分析 一般社団法人日本心理臨床学会 (編集) 心理臨床学事典 丸善出版 pp126-127.
- 上野まどか (2010). カウンセラーを志望する大学院生の動機と臨床実践で感じる困難との関係 明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻紀要, **15**, 9-26.
- 上野まどか (2013). 心理臨床家の動機と心理臨床活動における困難および満足感との関連—志望動機のタイプ「苦悩型」と「消極型」に着目して— 明治学院大学大学院心理学研究科博士論文
- Zaro, J. S., Barach, R., Nedelman, D. J., & Dreiblatt I. S. (1977). *A guide for beginning psychotherapists*. Oxford England: Cambridge U Press.
- (森野礼一・倉光修 (訳) (2008). 心理療法入門—初心者のためのガイド 誠信書房 第9刷発行)